

郭沫若の旧詩六篇と《愚者辨》

大 高 順 雄¹⁾ 于 亜²⁾
Yorio OTAKA Ya YU

要 旨

本論は『郭沫若著 郭平英・秦川編注 敝帚集與遊學家書』¹⁾によって若年の郭沫若(一八九二～一九七八)が一九〇六年から一九一三年にかけて作成した六篇の詩と『愚者辨』とを注釈し、和訳することを目的とする。これによって少年時代の郭沫若がどのように古典を学習し、どのように作詩したか、どのように考えていたかを如実に把握することが出来る。

鍵 語：郭沫若、平仄、古体詩、近体詩、新体詩

周知のように、古体詩は齊言(四言古詩、五言古詩、七言古詩)と雜言(樂府²⁾、徒詩³⁾)に分けられる。近体詩は絶句、律詩、排律に分けられ、次のように区別される。

- I.1 一句が五言よりなるものを五言詩という。上二言と下三言に分けられる。
- I.2 一句が七言よりなるものを七言詩という。上四言と下三言に分けられる。
- I.3 四句よりなるものを絶句という。
- I.4 八句よりなるものを律詩という。
- I.5 十句よりなるものを排律という。

近体詩の規則は押韻と平仄とに見られる⁴⁾。以下、○は平、●は仄、◎は平ないし仄を表す。

1) 大手前大学名誉教授

2) 大手前大学非常勤講師

1 北京：中国社会科学出版社、2012、pp. 4-11.

2 漢の武帝の樂府で制定された歌辞ないしその体裁に準じた詩。

3 樂府の音楽と関係に作られた詩。

4 参照：釋清潭・林古溪共編 作詩関門 東京 明治書院 大正13年 | 林古溪著 新修平仄字典 東京 明治書院 昭和10年 | 西澤道寛著 作詩法捷徑 附 平仄標示唐詩選(絶句之部) 東京 同文社 昭和14年 | 飯田利行著 漢詩入門韻引辞典 東京 柏美術出版株式会社 1994年 | Wikipedia 近体詩。

II 押韻

II.1 韻は平水韻に⁵拠り、平声三十種から選ぶ。

II.2 五言絶句の場合、第二句と第四句が押韻すれば正格であり、第一句も押韻すれば変格である。押韻しない第一句末と第三句末は仄とする。

II.3 七言絶句の場合、正格は第一句、第二句、第四句の末尾に押韻する。第二句と第四句の末尾のみ押韻し、押韻しない第一句を「踏み落とし」と呼ぶ。

II.4 第一句の韻字が偶数句末と異なるが類似する場合、「通韻」と呼ぶ。

III 平仄 (五言と七言に共通)

III.1 二四不同・二六対：一句において第二言と第四言の平仄を異にし、第二言と第六言の平仄を同じくする：○●●●○

III.2 平三連、仄三連の禁：句末の三字を平ないし仄としてはならない。

III.3 孤平と孤仄の禁：五言句においては第二言、七言句においては第四言の平が仄に囲まれてはならない。

III.4 反法：一聯（一纏りをなす二句）において、第二言、第四言、第六言の平仄を違えなければならない：●○●●●○● | ●●●○●●●

III.5 粘法：二聯（一纏りをなす四句）において、第二句と第三句の対応する第二言、第四言、第六言の平仄を同じにする：

●○●●●○● | ●●●○●●● | ●●●○●●● | ●○●●●○●

III.6 挟平格：押韻しない句において、○●●は●○●に換えてもよい。二四不同二六対は看過される。

IV 平仄式

IV.1 五言絶句

	平起式	仄起式
第一句（起句）	●○○●●	●●○○○
第二句（承句）	●●●○○（押韻）	●○●●○（押韻）
第三句（転句）	●●○○●	●○○●●
第四句（合句）	●○●●○（押韻）	●●●○○（押韻）

IV.2 七言絶句

	平起式	仄起式
第一句（起句）	●○●●●○○（押韻）	●●●○●●○（押韻）

5 近体詩の押韻に使われる106の韻（上平声15韻・下平声15韻・上声29韻・去声30韻・入声17韻）。中古音の音韻体系を表している。現在の山西省臨汾にある平水で刊行された金の王文郁の《平水新刊礼部韻略》（1229年）によるという説と、散逸した《壬子新刊礼部韻略》（1252年）によるとする二説がある。

第二句（承句）	◎●◎○○●○（押韻）	○○◎●●○○（押韻）
第三句（転句）	◎●◎○○●●	○○◎●○○●
第四句（合句）	◎○○●●○○（押韻）	◎●◎○○●○（押韻）

IV.3 五言律詩

	平起式	仄起式
（起聯）第一句	◎○○●●	◎●○○●
第二句	◎●●○○（押韻）	○○◎●○（押韻）
（領聯）第三句	◎●○○●	◎○○●●
第四句	◎○○●○（押韻）	◎●●○○（押韻）
（頸聯）第五句	◎○○●●	◎●○○●
第六句	◎●●○○（押韻）	○○◎●○（押韻）
（尾聯）第七句	◎●○○●	◎○○●●
第八句	◎○○●○（押韻）	◎●●○○（押韻）

IV.4 七言律詩

	平起式	仄起式
（起聯）第一句	◎○○●●○○（押韻）	◎●◎○○●○（押韻）
第二句	◎●◎○○●○（押韻）	○○◎●●○○（押韻）
（領聯）第三句	◎●◎○○●●	◎○○●○○●
第四句	◎○○●●○○（押韻）	◎●◎○○●○（押韻）
（頸聯）第五句	◎○○●○○●	◎●◎○○●●
第六句	◎●◎○○●○（押韻）	○○◎●●○○（押韻）
（尾聯）第七句	◎●◎○○●●	◎○○●○○●
第八句	◎○○●●○○（押韻）	◎●◎○○●○（押韻）

V.4 拗体

四句が一纏りなす場合、上記 III. 3 に反して、III. 2 「反法・反法・反法」となる。

V.5 挟平格

五言でも七言でも、韻を踏まない句の下三字を○●●の代わりに●○●とする。

V.6 禁忌

V.6.1 下三連には○○○も●●●も禁じられる。

V.6.2 第四字目の○を●で挟むことは禁じられる。（弧平の禁）

VI 律詩および排律における対句

初聯（最初の二句）と尾聯（最後の二句）を除き、領聯（第三句と第四句）、頸聯（第五句と第六句）は対句（意味、音韻、語法が対をなす句）を用いる。

VII 現代詩とは、古体詩および近体詩の平仄排列と押韻の規則に従わず、現代白

話の語彙と語法に従って書かれた詩とする。近体詩を模した定形詩と非定形詩がある。

+++

ついで、郭沫若の詩を吟味しよう。説明と注釈は郭平英・秦川により、注記と日本語訳は本論の執筆者による。

A. 旧 詩

1. 王制讲义 (1906年作)

- | | 平仄排列 | 仄起式 |
|-----------------------|---------|---------------|
| 1.1 经传分明杂注疏, | ○●○○●●○ | ◎●◎○○●● (押韻) |
| 経傳は明解だが、注記は粗雑である、 | | |
| 1.2 外王内圣頼誰傳, | ●○○●●○○ | ◎○○●○○● (押韻) |
| 理想の社会と人格は誰の伝記に頼ろうか、 | | |
| 1.3 微言已绝无踪影, | ○○●●○○● | ◎○○●●○○ |
| 深遠精緻な言葉は既に跡形もなく消失したが、 | | |
| 1.4 大义犹存在简篇, | ●●○○●●○ | ◎●◎○○●● (押韻) |
| 大意はなお六経に残存する。 | | |
| 1.5 不为骊珠混鱼目, | ●●○○●○○ | ◎●◎○○●● |
| 真珠に魚眼を混せてはいけない、 | | |
| 1.6 何教桀犬吠尧天, | ○○●●●○○ | ◎○○●●○○ (押韻) |
| 何が桀の犬をして堯の天に吠えさせるか。 | | |
| 1.7 而今云翳驱除尽, | ○○○●○○● | ◎○○●○○● |
| 今日は曇り空が晴れ渡り、 | | |
| 1.8 皎日当空四粲然, | ●●○○●●○ | ◎●◎○○◎○○ (押韻) |
| 煌々たる太陽が四世に燦然と輝く。 | | |

注記

これは第二句、第三句、第四句を除き、平仄の排列が七言律詩の平仄式に合致しないので、古体詩である。但し、初聯と尾聯は対句をなしている [VI]。

説明

郭沫若は1906年樂山県立高等小学堂に学んだ時、帥平均先生の《王制讲义》を聞いた後で感想を書いた。《王制》と《礼記》はその表題である。漢の武帝は博士らに命じて、六経から種々取り入れて、古制を制定させた。商・周の令制とは合わない所が

多く、《周礼》と必ずしも一致しない。帥平均は清朝末の四川の今文の著名な経学者廖平の弟子であった。彼の《王制讲义》は廖平の観点に沿った授業であった。飾りの多い卒読不可能な《礼記・王制》を分けて、経、伝、注、箋の四項とし、経は孔子の微言、伝は孔門の大意とし（微言大意、即ち言葉は少ないが意味は大きい）、注と箋とを後の儒の附説とし、読めるようにしただけでなく、生気があり面白い授業をした。《王制讲义》の通読により、廖平の学問的観点と托古改制の思想は郭沫若に深い影響を与えた。郭沫若は廖平の《今文経学》の観点到深く賛同し、廖平が《王制》をもって《春秋》を解釈し、一字も違うところなく、《微言大义》、《幸得初窺》、《通経致用》に達するとする。郭沫若は廖平を尊敬してこう言う。「新旧の過渡期の時代において革命性をもった学者ということが出来る。」この詩と次の詩が表現する思想的内容はこれである。なお、近文経学について要約しておこう。

清代になると、ふたたび今文学が注目されるようになり、清末の政治思潮や学問に大きな影響を与えた。今文で書かれた経書を今文経と注釈である伝を含めて《今文経伝》という。今文経伝の種類については、清末より民国にかけて若干の相違がある。以下に漢代（後漢）十四博士の《今文経伝》を掲げる。なお近文4は六経の順序を『詩』『書』『礼』『楽』『易』『春秋』とする。

経	十四博士	漢に伝えた人物
詩28卷	魯詩・齊詩・韓詩の三家詩	魯の申公・齊の轅固・燕の韓嬰
書29篇	大夏侯（夏侯勝）・小夏侯（夏侯建）・欧陽（欧陽生）	伏生
礼17篇	大戴（戴徳）・小戴（戴聖）	高堂生
易12篇	施氏（施讎）・孟氏（孟喜）・梁丘（梁丘賀）の三家易、京氏（京房）	田何
春秋11卷	嚴氏（嚴彭祖）・顔氏（顔安楽）公羊春秋	特定の人物はなく、公羊・穀梁・鄒氏・夾氏四家

注釈

第二句 内聖：“内聖外王”である。初めてこの語は《莊子》の“内聖外王之道”⁶に見られる。しかし後世では皆これを儒家思想の主要内容とする。“内聖外王”は儒家の“治世”に一貫した思想である。内容は“内聖之学”と“内聖外王之道”とを包括する。“内聖”は理想の人格であり、“内聖”（理想の人格）を通り過ぎることによって“外王”（理想の社会）を実現する。

6 《莊子》天下第三十三，p. 803.

第三句 微言：孔子の微言を指す。大義、孔子門下の弟子の經書要義を指す。微言大義、孔子の含蓄のある正確な言葉を用いて“六经”を改革することを言う。

第四句 簡篇：“六经”、《诗》、《书》、《礼》、《乐》、《易》、《春秋》の儒家經典の略称である。後に《乐》は失われ、ただ五經が残った。

第五句 骊珠混鱼目：鱼目混珠、成語。魚の眼が珠に似ていることから、仮をもって真を乱すことを言う。また、骊珠とは一種の珍しい貴い珠であり、《庄子》の“千金之珠、必在九重之淵、而驪龍頷下。”⁷の“驪龍頷下”に由来すると伝えられる。

第六句 桀犬吠尧天：成語。桀紂若狗向尧帝狂叫とは、悪人が善人を攻撃することの譬えである。

《晋书》・康帝记、史臣曰：“桀犬吠尧、封狐嗣乱、方诸后羿、曷若斯之盛也。”⁸

2. 跋《王制讲义》(1906年作) 跋 王制講義

	平仄排列	仄起式
2.1 博士非无述， 博士の述べないことはない。	●●○○●	◎●○○●
2.2 传经夹注疏， 經書を伝え、注釈を挟む。	○○●●●	◎○◎●● (押韻)
2.3 先生真有力， 先生には称賛すべきであり、	○○○●●	◎○○●●
2.4 大作继程朱， 盛んに活躍し、程朱を継ぐ。	●●●○○	◎●●○○ (押韻)

注記

これは五言絶句の平仄式に合致する近体詩五言絶句である [IV. 1]。

説明

文末の題詞を跋と呼ぶ。以前に既に《題〈王制讲义〉二首》があるが、いまだなお意を尽くさないで、更に跋詩一首を後に記す。〈王制讲义〉が少年の心の中で占めていた重要な地位を十分に説明し、彼が廖平の隸書經書学を崇拜していたこと、及び〈王制讲义〉が彼に与えた深い影響をを説明するに十分である。

注釈

第一句 博士：学官ともいう。漢の武帝が即位した後、講經博士を設けた。博士の

7 《庄子》列禦寇、p. 796.

8 《晋書》晋帝記七 十五：“史臣曰…桀犬吠堯封狐嗣亂方諸后羿曷若斯之甚也”，p. 93上段。

弟子の伝経活動は老衰した儒学は新しさを増して盛んになり、発展して漢代経学となった。

第三句 先生：廖平（1852-1932）を指す。帥平均の師である。廖平は、字を季平と云い、四川の井研の人、近代の今文経学家である。「尊孔尊経」を主張し、礼制をもって近古文経学、近文経学主《王制》と古文経学主《周礼》とを区別した。その主張「蒙文により誉に通じる」は経学史上において「画期的意義」をもつ。著述は約100篇を数える。

第四句 程朱：程颐、程颢、朱熹。宋代の経学者、儒学の伝統を継承し発展させ、“程朱理学”という新儒学を創始した。後世、程朱とも称する。

3. 月下（1906年 旧暦6月14日作）

	平仄排列	平起式
3.1 天边悬明鏡， 明鏡は空に懸り、	○○○○●	●○○●●
3.2 照我遺我像， 我を照らし我の姿を残す。	●●○○●●	●●●○○（押韻）
3.3 像不在鏡中， 我の姿は鏡中になく、	●●●●○○	●●○○●
3.4 但映青苔上， ただ青苔に映える。	●●○○●	●○○●●（押韻）

注記

これは原詩の平仄が五言絶句の平起式から逸脱するので古体詩である [IV.1]。

説明

この詩を作ったのは「廢曆」の「六月十四日夜」とされている。西暦八月三日に当たる。「廢曆」とは夏暦であり、また、旧暦と称す。中華民国は1912年1月1日より西暦起源を採用した。作詩した時は1906年ではなく、辛亥革命以後、20世紀の40年代初頭『敝帚集』を編纂した時に説明が加えられた。

注釈

第一句 明鏡：月亮。

第二句 像：身影。

4. 邨居即景 (1907年春作) 村の風景

	平仄排列	平起式
4.1 閑居无所事, 閑居して為す所なく、	○○○●●	◎○○●●
4.2 散歩宅前田。 宅前の田を散歩する。	●●●○○	◎●●○○ (押韻)
4.3 屋角炊烟起, 家の角から炊煙が立ち、	●●○○●	◎●○○●
4.4 山腰宿霧眠。 山腰は霧を宿して眠る。	○○●●○	◎○◎●○ (押韻)
4.5 牧童横竹笛, 牧童の竹の横笛を吹き、	●○○●●	◎○○●●
4.6 邨媪卖花鈿。 村の老女は花簪を売る。	○●●○○	◎●●○○ (押韻)
4.7 野鳥相呼急, 野鳥は騒がしく呼び合い、	●●○○●	◎●○○●
4.8 双双浴水边。 対をなして水辺で浴びる。	○○●●○	◎○◎●○ (押韻)

注記

これは近体詩五言律詩である [IV. 3]。

説明

作者は《敝帚集》を収録した際、作詩の時を「一九〇七年春」と記している。四川楽山文管編纂による《郭沫若少年詩稿》(以下《詩稿》と略) もこの詩を収録しており、作者が子供の頃の宿題に書いた作詩を通じて出来たものである。《詩稿》は詩の内容あるいは作者の親友の思い出によって、作詩の時期は「一九〇四年前後」、「満十三才で楽山の沙湾の古里にいたころ、即興で作った」もので、今日までに知られている作者の「最も早い詩歌作品である」。《詩稿》の編者は作者の姪である郭琦の思い出を伝えている：作者は家塾、绥山館で勉強していた時、「彼は弟、妹、姪を連れて家の裏の小道で魚釣りをしていた時、郷里の村の美しい景色を見て、俄かに詩想が生じ、この詩を吟じたのである。」編者と郭琦は以前にまだ《敝帚集》を見ていなかった時、上記の情景が本当であると信じていたが、「一九〇四年前後」に作られたという結語と「俄かに詩想が生じ、この詩を吟じた」という言葉は、第一資料の支持を欠くと考ええる。

注釈

第四句 宿霧：《詩稿》は作者がこの詩の原稿を書く時に、“濃霧”と書いたが、“宿霧”とすべきであった。宿霧とは前日の夜に生じた霧である。山間の宿霧は一夜では散らず、翌日も更に深く、山腹に漂う。詩を作り字を練る時に、“濃霧”よりも好ましいと思われる。

第六句 邨：村。

第六句 媼：老婦。

第六句 花鈿：金銀鍍翠を用いて作った服飾品である。白居易『長恨歌』に「花鈿委地無人收、翠翹金雀玉搔頭」花の簪は地に捨てられ拾う人もない。かわせみの羽も金の雀形の簪もとある。

5. 秋 緒（1910年作）

初 秋

平仄排列

5.1 秋风凛烈秋雨霖，	○○●●○○●○	秋の風は冷たく、秋の雨は長く、
5.2 郁郁独坐万象哭，	●●●●●●●●	鬱々と独り坐せば、万物は泣き、
5.3 手翻南华信口读，	●○○○●●●●	『南華』を繙きつつ、出任せに読み、
5.4 神游青衣江上屋，	○○○○○○●●	浮かれた心、粗末な衣服、江上の高殿。
5.5 忆我前日出嘉州，	●●●●●○○○	思えば私が前日嘉州を出た時、
5.6 田中禾黍方油油，	○○○●○○○○	田には稲や黍がちょうど青々としていた。
5.7 彼时犹夏今已秋，	●○○●○○●○	昨日はまだ夏、今日はもう秋、
5.8 草垒如山堆在畴，	●●○○○○●○	草むろは山をなし畦に置かれている。
5.9 锦江日夜赴东流，	●○○●●●○○	錦江は昼となく夜となく東に流れ、
5.10 江边红树绕江楼，	○○○●●○○○	畔の紅樹は高殿を取り巻く。
5.11 江流永以无回期，	○○●●○○○○	錦江は長々と流れ、戻ることなく、
5.12 寒暑代谢天地移，	○●●●○○●○	暑さと寒さが入れ替わり、天地が移る。
5.13 人生一世无自立，	○○●●○○●●	人生は一度、自ら立つことなく、
5.14 令人叹息长掩泣，	○○●●○○●●	人をして嘆かしめ、長く泣くを遮る。

注記

これは古体詩である。平仄の排列が七言律詩の平仄式 IV. 4に合致しないのみでなく、初聯と尾聯を除き、一聯内の二句が対句をなすという規則 VI にも反する。

9 唐白居易著 丁如明・聂世美校点《白居易全集》上海 上海古籍出版社 1999, pp. 158-59.

説明

この詩は1910年秋に作られた。この年の春、作者は初めて成都に行き、成都南校の四川省城高等学堂分設中学堂兩班に編入された。これは中学三年級に相当する。作者は《我的学生时代》(私の学生時代¹⁰)においてこう述べている。“学校的课程虽然好得一点，但也好得有限”(学校の授業はましだったが、限りがあった)、“怎么也引不起兴趣”どうしても興味が湧かなかった、“没有东西可学，只是读些课外的东西”学べきものがなかったから、教科書以外のものばかり読んだ。あるいは“游山玩水、吃酒赋诗的名士习气愈来愈深。东门外的望江楼、薛涛井、南门外的武侯祠、浣花溪、工部草堂、是常有游之地”山や川に遊び、酒を飲んで詩を作る名士の習わしが益々強くなった。東門外の望江楼、薛濤井、南門外の武侯祠、浣花溪、工部草堂はいつも遊んだ場所だった。この詩に表れているいささか消極的な苦悶の情は作者の当時の生活や思想の描写である。

注釈

第三句 南华：《庄子》¹¹、また《南华经》、《南华真经》を指す。郭沫若は「我自己是喜欢读《庄子》的人」特别是在秋风瑟瑟、秋雨霖霖、万象皆哭时、常以信口读《庄子》，神游其中，为精神安慰。[私は『莊子』を読むのを好む人である。特に秋には風がさあさあと吹き、雨がざあざあと降る。すべてが泣くとき、常に口から出まかせに『莊子』を読む。遊んでいるような気持ちになり、心の慰めになる。]

第八句 草堂：稻や黍を収穫した後、残りの茎が畦に山と積まれ、小山をなす。

第十句 江楼：望江楼。成都の東門の外、錦江の辺にある。

6. 游古佛洞 (1913年夏作)

古仏洞に遊ぶ

	平仄排列	句末音	
6.1 寺枕山腰俯瞰河、	●●○○●●○	hé	寺は山腰に枕し河を俯瞰し、
6.2 层楼叠嶂两巍峨。	○○●●●○○	é	重楼は高く、連峰は険しい。
6.3 年年飘泊锦官道、	○○○●●○○●	dào	年毎に錦官道を走り、
6.4 四载于今七度过。	●●○○●●○	guò	四年で七度に及んだ。
6.5 穷愁减却登临兴、	○○●●○○●	xìng	意気消沈を断ち高所から眺めると、
6.6 冷落寒山空照影。	●●○○○○●●	yǐng	寂れた寒山は空しく影を落とす。

10 小野忍・丸山昇訳『黒猫・創造十年他 郭沫若自伝2』東洋文庫126 東京 平凡社 昭和47年(初版第2刷)「私の学生時代」、p. 97を参照。

11 野村茂雄著『鑑賞 中国の古典④ 老子・莊子』東京 角川書店 昭和六十三年 pp. 169-374. なお、神仙思想は「千歳厭世、去而上僊、乗彼白雲、至於帝郷。」(p. 269: 千年も生きて世の中が厭わしくなれば、世を捨てて天に上り、あの白雲に乗って、天の都へ行けばいい。)とある。古仏洞には神仏混淆が顕在している。

- 6.7 晨醉江楼棹歌发, ○●○○●○○ fā 朝は高楼に心酔し舟歌を聞き、
- 6.8 醒时夕阳挂西岭, ●○○○●●● lǐng 覚めれば夕日が西嶺に掛る。
- 6.9 山寺飞将入眼来, ○●○○●●○ lái 山の寺は高々と目に映る。
- 6.10 兴机触发心花开, ●●●●○○○ kāi 情は触発され心の花が開く。
- 6.11 醉眼欲穷天下势, ●●●●○●● shì 酔眼で天下の形勢を究めんと欲し、
- 6.12 揽衣直上最高台, ●○●●●○○ tái 衣を押えて直ちに最高階に登る。
- 6.13 人生及时行乐耳, ○○●○○●● ěr 人生はその時々を楽しむのみ、
- 6.14 长此郁抑何为哉, ○●●●○○○ zāi この長い憂鬱を抑えて何になろう。
- 6.15 步趋寺首无应门, ●○●●○○○ mén 寺の前に走り寄るが応答がなく、
- 6.16 簷瓦半垂欲飞堕, ○●●○●○○ duò 軒の瓦は半ば崩れ落ちそうである。
- 6.17 大叫狂生郭八来, ●●○○●●○ lái 放蕩者の郭八到来と大声で叫ぶが、
- 6.18 但听山壑呼长诺, ●○○●○○○ nuò 谷が長い木霊を返すのを聞くのみ。
- 6.19 小径迷离草欲封, ●●○○●●○ fēng 小道は定かでなく草に阻まれ、
- 6.20 阶前横过一沟水, ○○○●●○○ shuǐ 階段の前を川が横切り流れる。
- 6.21 湛然涵碧悄无声, ●○○●●○○ shēng 澄んだ緑色の水は音も立てず、
- 6.22 水禽飞掠人间去, ●○○●○○○ qù 水鳥は人を掠めて飛び去る。
- 6.23 徐徐缓步殿阶上, ○○●●●○○ shàng 徐々に神殿の段を上れば、
- 6.24 神物奇古穷殊相, ○●●●○○○ xiāng 神物は奇怪で古く様々な形相である。
- 6.25 就中或坐或复卧, ●○●●●●● wò 坐するものあり臥すものあり。
- 6.26 释道分庭礼相抗, ●●○○●○○ kàng 仏教と道教とは対等である。
- 6.27 蝙蝠白昼也欺人, ○●●●●○○ rén 蝙蝠は白昼に人を侮り、
- 6.28 盘空鸣鸣学鬼声, ○○○○●●○ shēng 飛び回って奇声を発する。
- 6.29 寒气冷然沁肝隔, ○●●○●○○ gé 寒気は冷たく肝臓に浸み透り、
- 6.30 忘却世间炎热情, ●●●○○●○ qíng 俗界の炎熱を忘れさせる。
- 6.31 扶梯更上一层楼, ○○●●●○○ lóu 階段をつたって更に階を上り、
- 6.32 俯视不肯久低头, ●●●●●○○ tóu 見下ろすが長くは見続けられない。
- 6.33 楼高岁久动欲活, ○○●●●●● huó 楼閣は高く古びて揺ら揺らす。
- 6.34 一步一歌如乘舟, ●●●○○○○ zhōu 歩きつつ歌い舟に揺られる。
- 6.35 我心颇厌人间世, ●○○●○○○ shì 私の心は世を嫌悪する、
- 6.36 用敢临危登绝地, ●●○○○●● dì 敢えて危険を冒し地と断絶しよう。
- 6.37 人生一死等鸿毛, ○○●●●○○ máo 人は必ず死ぬ、鴻毛に等しい、
- 6.38 蛇跼蜩翼何以异, ○○○●○○● yì 蛇の腹と蟬の翼とはどう違うのか。
- 6.39 得升绝顶如飞仙, ●○●●○○○ xiān 山頂に上ると飛ぶ仙人のようだ、
- 6.40 晚山苍茫坚晚烟, ●○○○○●○ yān 夕暮の山は漠として夜の帳が落ちる。

- 6.41 拂寻古洞复不得, ●○●●●●● dé この古洞を暫時でも尋ね得まい、
 6.42 兴尽悲来催上船, ●●○○○●○ chuán 興は尽きて悲しくなり乗船を促す。

注記

1) 句末音韻の排列は次のようである。

A 四句

- A1 群 ai-ai-i-ai : 6.9-6.10-6.11-6.12
 A2 群 an-an-e-an : 6.39-6.40-6.41-6.42
 A3 群 ang-ang-o-ang : 6.23-6.24-6.25-6.26
 A4 群 en-eng-e-ing : 6.27-6.28-6.29-6.30
 A7 群 ou-ou-uo-ou : 6.31-6.32-6.33-6.34
 A5 群 i-i-ao-i : 6.35-6.36-6.37-6.38
 A6 群 ing-ing-a-ing : 6.5-6.6-6.7-6.8

B 三句

- B1 群 e-ai-en : 6.13-6.14-6.15
 B2 群 eng-ui-eng : 6.19-6.20-6.21
 B3 群 uo-ai-uo : 6.16-6.17-6.18

C 一句

- C1 e-e : 6.1-6.2

D 二句

- D1 ao-uo : 6.3-6.4
 D2 u : 6.22

2) これは押韻と平仄の規則に束縛されない新体詩 (VII) の一種である。

跋 文¹²

古佛洞在蓉城东约百里所。楼阁高耸、枕山面河、舟中遥望、形构奇古。俗传系鲁公输班所建、不甚荒诞。癸丑夏日、予偕硯鱼、韓荪、鹤樵等同舟南下、行作归计。溽暑如蒸、金石欲流、新娶骨折、苦不可耐。日晡、舟行过此、为舟子怱怱、言寺中景物、颇有可观、逐次泊焉。同人中以予兴独豪、蹑屣牵衣、飘然自上。楼基尽削山岩而成、割石磴作梯級、构自拙。維岁久木蠹、几难乘人。且距地颇高、危險殆不可名状。登舟赋此长句、以纪其事。¹³〔古仏洞は蓉城の東約百里のところにある。楼閣は高く聳え、山

12 郭沫若が《游古佛洞》に付加した文である。

を枕とし、河に面している。舟から遠望すれば、奇妙で古めかしい。魯の公輸班¹⁴の建立になるという俗説には根拠がない。癸丑¹⁵の夏の日、私は偕硯魚、韓荪、鶴樵などと船で南へ下る。舟が所々で停泊する。じめじめと蒸し暑く、金石も溶けんばかりである。新しい扇の骨も折れ、苦しさに堪えられない。夕方に舟は目的の港に差し掛かる。寺の中に見るべきものがある、頗る見る価値がある、暫く舟を止めておく、という船頭の言葉に誘われ、同船の仲間の内では私だけ興味があるので何の気なしに下船する。楼閣の礎は岩を削り抜いたもので、階段は石を割って作られ、古く拙い。渡り木は年を経て虫に食われている。上を歩くのは何と難しいことか。楼閣は地面から頗る高いが、危険とはまず言い難い。舟に戻ってこの長詩を作り記し留めた。]

説明

1913年郭沫若は四川省城高等学堂理科で一学期学んだ。同年6月天津陸軍軍医学校が生徒（招考新生）を募集した際、四川から6名が応募した。郭沫若は応募して採用された。この『游古佛洞』とその跋文は彼が陸軍獣医学校に採用された後に記したものである。彼は成都から船に乗り、樂山に戻り、そこから重慶へ行く途中に閃いた考えと思いをこの詩に述べた。彼はこの機会に四川を離れようと決した。志を立て、雄飛しようという宿願を叶えようとしたのである。郭平英はこの詩を『愚者辨』と『答某君书』と共に『郭沫若早年作品三篇』という題の下に『新文学史料』（1982年第4期）¹⁶に公表した。

注記

《雙流縣志》によれば、
「古佛洞大佛 位于黄佛乡古佛洞,府河右岸。凿于宋代,依崖壁而凿侧,高约7米。两旁刻有阿罗汉像,高约3米。左右有石洞二,内有石床,石灶。对外开放」¹⁷。

古佛洞大佛は黄仏郷古佛洞。府河右岸にあり、宋代に彫られ、岸壁に彫り込まれ、高さは約7メートル。両側に彫られた阿羅漢像は高さ約3メートル。左右に石洞が二つあり、中には石作りの床と竈がある。参観可能。

『仁壽県志』（光緒七年1886年）¹⁸によれば、
古佛洞在錦江之旁距城一百二十里洞在半巖深三丈許中供古佛一尊旁有小洞深丈許舊廟

13 成都の古称。

14 魯の著名な建築家。後世、敬意を払って建築家の師とされた。

15 みずのとうし

16 《新文学史料》1982.8.30, pp. 114-15.

17 四川省双流县志编纂委员会 编纂《雙流縣志》，成都，四川人民出版社，1992，p. 805.

18 姚令儀原纂・李元續續纂『四川方志之二十三 仁壽縣志』清・嘉慶八（1805）年刊，抄補本景印本精裝三冊 臺灣學生書局，中華民國五十七年，（1968），p. 202.

久頼像在荊榛間乾隆五十四年忽有張居士自瀘甯州來募緣於與修或謂其吞噬居士即自巖投下而身不傷眾信之釀金數千自巖麓跨堰建望江樓一座乘樓而上一緣巖修樓遶樓得路凡五層至洞大殿一座殿後復有樓二層直登山頂蓋登山而人不知其險也「古仏洞は錦江のほとり、町（城）を離れること百二十里。洞が半岩にある¹⁹。深さは約三丈²⁰。中に古仏像一尊を祭る。傍らに小洞あり。深さは約一丈。旧廟は廃れて久しく、佛像は荊と榛（はしばみ）に囲まれる。乾隆五十四年²¹、突然に張居士が瀘州²²から来て布施を集めて再建した。それを非難されたためか、張居士は岩から飛び降りた。身は傷を負わなかった。誰もこれを信じている。集まった金は数千元、岩の麓から堰を跨いで、‘望江楼’を建てた。楼に入って上り、岩に合わせて楼を修復し、楼に沿って凡そ五階まで上がると、洞に着く。そこが本殿（大殿）となる。本殿の後ろに更に二層があり、真っ直ぐ山頂に到ることが出来る。蓋し岩に沿って山を登る。人はその危険を知らない。」]

金華庵は黃龍溪鎮、もとは古仏洞の場鎮にあり、庵廟（僧院、尼寺の大門は東に面し、府河に相対する。陡峭山崖を背にし、山に依って建つ。海拔485メートル。庵内の碑文の記載によれば、金華庵は北宋の太祖、乾徳元年に創建され、明末の戦乱によって破壊された。乾隆²⁴四十六年から五十四年（公元1781～1789）にかけて再建された。伝承によると、数百年前、牧馬山に“金華庵”という古い廟があった。当時の封建統治者は当該の廟の敷地内に皇帝の墳墓を修築しなければならなくなったため、急いで金華庵の住職に庵を移させた。こうして“金華庵”は上方の現在の所へ移され、山脚の下に建築されたが、もとの名“金華庵”を残した。この再建された“金華庵”は牧馬山の東麓にあり、河に臨んで、山に依り、五重の大殿を建て、庵檐櫺比、五層は天を衝き、敷地は約二千四百平方メートルである。庵廟の姿は高大、梯形をなし、下層から頂層まで約三十メートル、すべてが岩を穿って作られた。

また『仁寿县志』の記載によれば、「望江楼（金華庵）は古佛洞郷錦江（府河）の浜にあり、楼は岩麓に立ち、堰水を（古佛堰）を跨いで作られている。凡そ五層、大殿一座…」また、観音殿の上に「古佛勝景」の四字があり、傍に大宗乾徳元年²⁵（公元963年）と書かれている。

伝承によれば、古仏洞場鎮も金華庵を修復して建立されたものである。“金華庵”

19 下に「すべてが岩を穿って作られた」とある。

20 1丈は10.3米。

21 乾隆五十四年は1790年。

22 今日の四川省。

23 北宋の太祖は建隆（960～1）である。

24 乾隆（位1735～95）は清の第六代皇帝である。

25 顯隆か。

が建立される前には、いまだ山脚の下に場鎮が作られていなかった。当地の古老である郭氏の説明によれば、金華庵の前に、山上に一つの小さい廟があったが、長年修復されなかったのも、やがて荒廃したとのことである。後に、金華庵が建立されてから、庵内に香火が次第に多くなり、周辺の住民も自然に集まり山脚の下に来て、河に臨んで住み、場鎮を形成した。金華庵の中に大仏が一尊ある。また、庵廟が先に存在したので、「先は古なり」、故に「古佛」と名付けられた。加うるに、廟（金華廟）の内に深い洞があるので、この場鎮も古仏洞という名付けられた。そこを訪れる時にはいつも、あるいは仏の誕生日には、場鎮内の人声は喧しく、賑やかである。

末尾の図版を参照。

B. 《愚者辨》(1906年)

有客造余舍而問余曰：吾常見乎愚者之昏昏²⁶夢夢²⁷、渾渾噩噩²⁸、朝夕疾作²⁹、沒世而无闻者、未嘗不為之悲也。余曰：吁、是何言哉。夫愚者視于無形、听于無聲²⁹、不漫不亶³⁰、養其天真³¹、与天地合其德³²、人不能指其過。夫生而天隨、死而物化³³、以視彼器器者³⁴、蒿然³⁵而饗³⁶乎富貴、決性命之情而竟³⁷競³⁸乎榮辱、虽名垂景鐘³⁹而遺後世之訾議者⁴⁰為何如耶。老子曰

26 昏昏夢夢、糊塗、迷惑的樣子。

27 渾渾噩噩、原意為渾厚質朴，嚴肅正大貌。諸子百家叢書 賈誼著・盧文照校《賈誼新書》—揚雄著・李軌注《揚子法言》上海古籍出版社 1989，《揚子法言》第五卷 問神：虞夏之書渾渾爾。商書灝灝爾。周書噩噩爾（p.12下段）。

28 疾作、辛勤勞作。

29 《呂氏春秋 中》卷十八（二） 重言：“故聖人聽於無聲、視於無形。詹和何・田子方・老聃是也。”（p.608）。《老子》第四十一章：“大器晚成、大音希聲、大象無形。道隱无名”（p.97）。

30 不漫不亶，漫灋、放逸、疲沓。大意是不放逸疲沓。郭平英は原稿の灋を亶と修正。「氣儘、自墮落でない」

31 天真、指未受礼俗影响的本性为天真。《莊子 下》漁父 第三十一：“禮者、世俗之所為也。真者、所以受於天也、自然不可易也。故聖人法天貴真、不拘於俗”（p.779）。

32 德、指得之于“道”的德性。《老子》第二十五章：“人法地、地法天、天法道、道法自然”（p.68）。抛却一切人为的道德观念、人才能接近于“道”、进而达到“与天地合其德”的“同于道”的境界。冯友兰在《新原人》中称为“這種宗教底思想、其最高處、亦能使人有一種境界、近乎是此所謂天地境界。”（p.91）。

33 生而天隨、死而物化。庄子认为人的生死是自然变化、顺其自然而生、顺其自然而死。《莊子》下知北游：“人之生氣之聚也。聚則為生、散則為死”。

34 器器者、看重爵录名位的人。前器字、动词、看重；后器字、名词、爵录、各位。

35 蒿然、气蒸出貌。《陆游》大侄挽辭：卷四十一，“一官常一骭髀，万里忽烹蒿”（p.195）。此谓臭气薰天。一作忧虑不安貌。|《聖武記》下 卷十 教匪 嘉慶陝靖寇記八：“當軍興之際、天子蒿然議移巡撫、移提督、樓下廷議、或可或否”（p.451）。意謂終日為追名竹逐利而忧煩。

36 饗、貪婪。

37 決性命之情。《莊子 下》駢拇第八：“不仁之人、決性命之情而饗富貴。”（p.311）。決、絕。

38 竟競乎、爭先恐后。

39 名垂景鐘。景鐘、鼎鐘。將功名銘刻于鼎鐘、名垂青史之意。

40 訾議、毀謗非議。

大德不德是以有德⁴¹、又曰至德之人其貌若愚⁴²。唯愚者之为众人之所不知、乃能成其大也⁴³。弥塞乎宇宙之间而与天地相终始也、汪洋乎大矣⁴⁴。客曰敢问何谓也。曰夫愚者有君子之道⁴⁵三焉。其为性也、泛爱百物、不塞蝼蚁之穴、不侮惴栗之虫⁴⁶。人之有患、若己有之、恤鰥寡、养孤独、不伐己之德、不惜货贿以济人之穿困、仁也⁴⁷。无荣辱之辨、不忌人之修⁴⁸、不议人之短、被莫大之辱而不忿、惟能下人、是以虽暴戾恣睢、待之不能伤、智也⁴⁹。不避权贵⁵⁰、不畏强圉⁵¹、视生死如蓬庐⁵²、虽王公大人不能屈、赴汤蹈火而不辞、勇也。智、仁、勇三者、天下之达德也、此君子之所难能。昔者顏子以仁而成其贤、箕子以佯狂而保其身、史鰌⁵³以死谏而匡其君之过、之三子者至德之士也、而愚者者兼之。愚乎愚乎、吾将⁵⁴以汝为师乎。虽然若今世之刚愎自用、狂妄无知者、则非所谓愚、诈而之已矣。客曰都、请笔之于书、以待学者乎⁵⁵。[客が我が家に来訪して、私に尋ねて言った。「私がいつも目にするのは、愚者がぼんやりとして何も分からず、頑是なく無邪気であり、朝な夕な病んでいることです。死んでも噂する人がいない。こんなに悲しいことはありません。」私は言った。「ああ、それはどういう意味ですか。ああ、愚者は無形に形

- 41 《老子》第三十八章：“上德不德、是以有德。下德不失德、是以無德。”(p. 92)。| 王弼注：“德者得也。”“何以得德、由乎道也。”上德指天真自然、下德指仁义礼智。天真自然体现着天道的必然、在道之内、是道的部分。仁义礼智在道之外、与道无干系、是刻意觅求的世俗道德在人身上的显露。
- 42 至德、即大德、上德。其貌若愚。《老子》第二十章：“我愚人之心哉！沌沌兮。俗人昭昭、我獨若昏、俗人察察、我独悶悶。”(p. 61)。大德之人、貌似愚人。老子为道崇愚、不是把人引到不知不识的路径、而是使人回复淳朴厚实的自然状态。绝学无忧、绝圣弃智、并非不要智慧、智识。愚、是淳朴厚实。弃智、不是一般的反文化、而在克除伴随知识文化而来的虚伪诈饰。人的本性不是仁义礼智、而是人的原始美德、自然本性。
- 43 大、指境界。成其大、指由“德”及“道”、达到同“道”的境界。这种境界不为一般人所知。
- 44 弥塞乎宇宙之间而与天地相终始也、汪洋乎大矣。指由“德”及“道”、达到同“道”的境界、与天地始终、弥塞乎宇宙之间、像汪洋大海一般。弥塞：充满、无所不在。
- 45 君子、完美道德之人。道、做人的原则。君子之道有三：仁、智、勇。
- 46 不塞蝼蚁之穴、不侮惴栗之虫。蝼蚁、蝼蛄、蝼蛄。栗、无足软体小虫。惴栗、虫动的样子。语出《莊子 下》胠篋第十“將為胠篋探囊、發匱之盜而而為守備、(p. 328)。此喻不伤害微贱的生命。
- 47 伐、损、伤害。
- 48 货贿、金钱、财物。
- 49 仁、儒家最高道德原则、儒家人生哲学核心。《孔子》論語 顏淵 第十二：“顏淵問仁。子曰、克己復禮為仁”(p. 258)。| “樊遲問仁。子曰、愛人”(p. 277)。
- 50 辨、分辨。引申为计较。
- 51 修、长、长处。
- 52 下人、居于人后、谦让。《春秋左氏傳》卷十一 宣公下：“其君能下人”(p. 288)。
- 53 暴戾恣睢、粗暴强横、任意胡为。亦省作“暴恣”。
- 54 权贵、居高位有权势的人。李白《夢游天姥吟留別》：“安能摧眉折 腰事權貴、使我不得開心顏”。
- 55 强圉、强暴、威势。《漢書》卷九十九上 王莽傳 第六十九上：“不侮鰥寡、不畏强圉”(p. 4116)。
- 56 蓬庐、客舍。《莊子》天運 第十四：“仁義、先王、先王之遽廬也、止可以一宿、而不可久處”(p. 435)。天下之达德也。
- 57 达德、通行不变的美德。孔子《中庸》第二十章：“知仁勇三者。天下之達德也”(p. 48)。
- 58 顏子、顏回、孔子弟子、因仁成为贤人。
- 59 箕子、殷紂王诸父、因谏说紂王被关进监牢、后又作奴仆、于是佯装疯子、而保其性命。
- 60 史鰌、史鱼、春秋时卫国大夫、以正直敢谏著名、相传死前遗命卫灵公退弥子瑕、用蘧伯玉。孔子《論語》衛靈公 第十五：“子曰、直哉史魚、邦有道如矢、邦無道如矢。君子哉蘧伯玉”(p. 258)。
- 61 都、叹词、啊。
- 62 学者、后学之人。

を見、無声に声を聞くのです。放任せず、逸楽せず。天真爛漫を養い、天地に徳を合わせ、人の過ちを責めません。愚者は生き、天が従い、死して物と化すのです。爵位と俸禄を重んじる者は不安であり、富貴を追求め、生命の情を断ち、先を争って終に栄辱を求め、名を歴史に残しますが、後世の誹謗非難を受けます。何故そうなるのでしょうか。老子曰く、『大徳と不徳は有徳である。』また『至徳の人の顔付は愚者のようである。』ただ、愚者の徳は衆人が知らないからこそ、初めて境となり得るのです。それは宇宙の間に充滿して、天と地との境であり、洋洋たる大海です。」客は取えて問うた。「何故ですか。」私は答えた。「愚者には君主の三（仁、智、勇）があります。その性は百物を広く愛し、おけらや蟻の穴を塞がず、這い廻る虫を侮りません。人は災禍憂患に遭います。たとえ自分に不幸があっても、身寄りのない人を憐れみ、孤独な人の面倒を見て、自分の徳を損なわず、財を惜しまず、困窮の人を救う、これが仁です。光栄と恥辱を区別せず、人の長所を妬まず、人の短所を責めず、最大の恥辱を蒙っても怒らず、ただ謙虚寛容であり得る、たとえ横暴粗暴でも、人を傷つけてはいけません、これが智です。高位の権勢家を避けず恐れず、生死を客舎と見なし、王侯貴人にも屈することはあり得ない、熱湯に入り、火を踏むことを辞さない、これが勇です。智、仁、勇は天下の徳であり、これは君子にもなし得ないところです。昔の顔回は仁をもって賢とし、箕子は狂を装って身を保ち、史鰌は死を以て君主の過を正しました。これら三人は至徳の人であり、愚者は彼らを兼ねているのです。愚や、愚や、我は汝を師とせんか。もし今世の片意地で傲慢無知であるとしても、いわゆる愚ではなく、虚偽しか言えません。」客が言った。「ああ、筆は書に行き、学を待って下さい。」

説明

郭沫若は楽山県立小学堂と官立中学堂の生徒だった時、師平均先生と黄经华先生から堅実な国学の基礎を教わり、中国哲学については、老子と荘子の道家哲学、孔子と孟子の儒家哲学、特に道家と儒家の人生哲学をかなりよく理解した。儒家と道家の多種多様な相関関係は、旧時代の伝統と知識人の人生の追求、道德の理想の一大特色であり、《愚者弁》における主要な表現は多種多様である。“道”と“徳”を論じる場合、前半は老子の《道德経》をもって立論し、後半は《仁、智、勇》という古今不滅の三徳目（達徳）、更に孔子の儒家的道德の理想、人生の境地に戻る。論理上はと通らないところもあるかも知れないが、この文には雑多なものが共に混在している道德的理想、人生の境地であり、儒家の道の両家の人生哲学・道德的理想の最も核心的な部分、精華の存する所である。

本篇はかつて《游古佛洞》、《答某君书》と共に《郭沫若早年作品三篇》という総題のもとに《新文学史料》1982年第4期に刊行された。

終わりに、戦後に作られた二詩を掲げよう。

C. 松村謙三記念館竣工記念 (1971年)

松村謙三先生千古

松村謙三先生永遠に

平仄排列

渤海汪洋一葦可航

●○○○●●○○(押韻)

洋々たる渤海を葦舟にて渡り得たり。

敦睦邦交勸改農桑

○●○○○●●○○(押韻)

両国親善に務め農制改革を励ませり。

後継有人壯志必償

●●●○○●●●○(押韻)

後を継ぐ者あり壯志必ず報われむ。

先生之風山高水長

○○○○○○○●○(押韻)

先生の偉風山河の如く永遠なり。

説明

これは八言四句よりなる新体詩⁶³（新詩ないし近代詩）である。

D. 第六高等学校創立75周年記念 (1975年)

平仄排列

仄起式

陟彼操山松径斜

●●○○○●○

◎●◎○○◎●○

かの操山に登ると、松の坂道が続いた。

思郷曾自望天涯

○○○●●○○

◎○○◎●●○○

故郷を思い、昔一人で天空を眺めた。

如今四海為家日

○○●●○○●

◎○○◎●○○●

今や四海は、一家となる。その日に、

轉憶操山勝似家

●●○○○●○

◎●◎○○◎○○

懐かしみ思う、操山は我が家に勝ると。

説明

これは平仄式に則る七言絶句である。

63 呼称は一定していない。因みに、横打理奈氏は「新詩」とし（東洋大学中国哲学文学科紀要“郭沫若の新詩誕生を探る―旧詩の考察から―”，2002年，pp. 71-93）、藤田梨那氏は「近代詩」（言文一致体の詩歌）とする（『郭沫若著 女神 全訳』東京 明德出版社、2011，p. 2）。

結 語

以上の僅かな資料から判断することが許されるとすれば、郭沫若は、

- 1) 思想については、《1. 王制讲义》、《2. 跋王制讲义》、《愚者弁》に見られるように道教と儒教に関心が強かった。後日、これは自己批判の対象とする⁶⁴。
- 2.1) 詩形については、古体詩《1. 王制讲义》、《3. 月下》、《5. 秋緒》と近体詩《2. 跋王制讲义》と《4. 邨居即景》と現代詩 [VII] 《6. 游古佛洞》の三詩法に秀でている。
- 2.2) 戦後は、伝統的な五言絶句《第六高等学校創立75周年記念》も現代詩《松村謙三記念館竣工記念》も試みる。
- 3) 《4. 邨居即景》に示されているように、即興詩の才がある。
- 4) 《6. 游古佛洞》に表れているように、好奇心が強い。

+++

参考文献

- ・税海模 “少年郭沫若与儒家文化刍议” 《乐山师范学院报（社科版）》，1991年2期 pp.25-31.
- ・郭沫若著 野原四郎・佐藤武敏・上原淳道譯『中国古代の思想家たち 十批判書』東京 岩波書店 1953 「五 莊子の批判」, pp.296-311.
- ・孙文刚 “论郭沫若少年时代的诗歌创作” 《郭沫若学刊2007年第2期（总第8期） 2007年02.01, pp.85-7.

出典漢籍

- ・漢書：班固撰 顔師古注 漢書 第十二冊 卷九六至卷一〇〇（傳六） 中華書店 1962年。
- ・揚雄《法言・問神》；諸子百家叢書 賈誼著・盧文照校《賈誼新書》—揚雄著・李軌軌注《揚子法言》上海古籍出版社 1989。
- ・孔子：新訳漢文大系1 吉田賢抗著 論語 東京 明治書院 平成16年。
- ・晉書：和刻本正史 晉書（影印本）（一） 東京 汲古書院 昭和46年。
- ・春秋左氏傳 卷第十一：國譯漢文大成 編集兼発行者代表者 鶴田久作 經史子部第十九冊（第五帙の三） 春秋左氏傳の三 東京 国民文庫刊行会 大正12年（3版）。
- ・聖武記：[清] 魏源撰 聖武記 北京 中華書局 1984。
- ・莊子：新訳漢文大系8 遠藤哲夫・市川安司著 下 東京 明治書院 昭和50年。
- ・中庸：金谷治・湯浅幸孫・日原利国・加地伸行訳 世界古典文学全集18 東京 筑摩書房 昭和46年。
- ・馮友蘭：民國叢書 第五編・14・哲學・宗教類 《新原人》 上海 朱經農 中華民國三十五年（1946）。
- ・陸游：钱仲联 校注 陆游全集校注5：剑南诗稿校注5 浙江教育出版社 杭州 2011年。

64 郭沫若著作編輯出版委员会編《郭沫若全集 歴史編 第二卷 十批判所》、“孔墨の批判”、“儒家八派の批判”、“莊子の批判”、“荀子の批判” 北京 人民出版社 1982, pp.74-251.

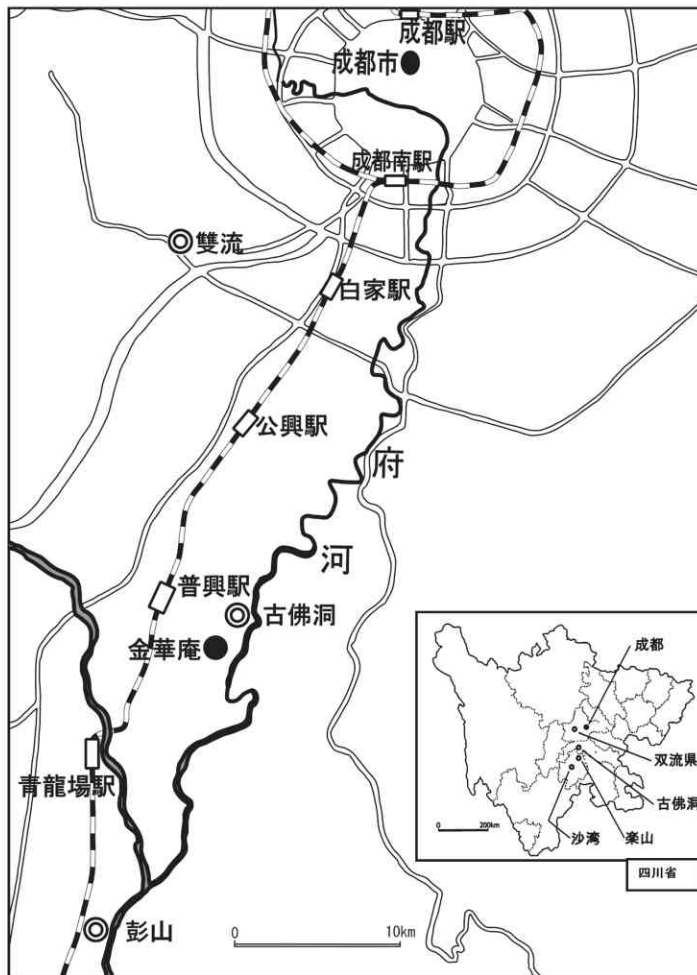
- ・李白：李白詩選注編選組 李白詩選注 上海古籍出版社 1978。
- ・老子：鑑賞 中国の古典④ 野村茂夫 老子・莊子 東京 角川書店 昭和63年 老子 pp. 11-156。
- ・呂氏春秋：新編漢文選2 楠山春樹著 呂氏春秋中 東京 明治書院 平成9年。

+++

おわりに

本論作成にあたって、文献検索について郭平英女史（前郭沫若記念館館長）と秦川老師、音韻について平山久雄氏（東京大学名誉教授）、今日の詩の動向について岩佐昌璋氏（九州大学名誉教授）の懇切なご教示を受けたことに衷心から謝意を述べる。なお、平仄排列は大高順雄に、図版は于亜によるものである。

図版



参考資料：「四川省地図冊」星球地図出版社 2016。

「雙流県志」四川省雙流県志編纂委員会 四川人民出版社 1992。